

**京都市立洛陽・伏見工業高校の統合・再編による「新しい工業高校」の  
 整備予定地の決定について**

「新しい工業高校」の整備候補地については、本年4月に策定した洛陽工業高校・伏見工業高校の統合・再編に当たっての「京都市立工業高校の再編に関する基本方針」に則り、「新しい工業高校の整備候補地選定委員会」を設置し、洛陽工業高校・伏見工業高校と立命館中学・高校の3校を多角的な観点からの比較検討を進めてきました。

これまでの計4回の公開での検討会議、1回の現地視察における検討結果として、本年12月6日に教育長に提出された「立命館中学・高校を最有力候補地とすべき」とする「まとめ」を踏まえ、本日の教育委員会会議において、立命館中学・高校を「新しい工業高校」の整備予定地とすることが議決され、決定となりました。

今後、両校が築いてきた歴史と伝統をさらに充実・発展させるとともに、生徒・保護者のニーズに応えることができるよう「新しい工業高校」づくりに努めてまいります。

記

整備予定地（現 立命館中学・高校）について

所在地	伏見区深草西出山町23	グラウンド面積	23,223㎡(人工芝グラウンド, 野球場, テニスコート等)
敷地面積	67,573㎡	都市計画内容	市街化調整区域・第2種風致地区
施設面積	21,710㎡ (昭和63年以降建築)	参 考	平成26年9月に長岡京市へ移転予定

整備予定地とする理由について

- 平成25年12月6日に「新しい工業高校の整備候補地選定委員会」から教育長に提出された「まとめ」に示されているとおり、「公立では見られない充実した教育環境」は、「京都市立工業高校将来構想委員会」の「最終まとめ」の提言に示された「新しい工業高校」が担う人材育成やあり方を実現していく上で有効な活用が期待できる。
- 整備期間中において、日頃の教育活動や高校生活の魅力の一つであるクラブ活動の制限は極力避けるべきであり、「まとめ」に示されている洛陽工業高等学校・伏見工業高等学校での整備計画案では、工事着工から竣工までの工期は最短で2年半、最長で4年以上を要するが、整備予定地の案では着工から1年以内の早期の整備が可能な点及び「工事に伴う生徒の教育活動への影響が生じない」点についても評価できる。
- 安全性については、建物が活断層の直上になく、耐震性が十分に確保されていれば地震が発生しても建物倒壊の危険性は低いと考えられる中、立命館中学・高校は新耐震基準を満たしており、活断層の直上には位置していないことが確認されている。また、擁壁等も経年劣化は認められるものの、緊急性はないとの見解が示されており、リニューアル工事により施設の長寿命化、安全性の向上が可能である。
- 利便性については、洛陽工業高校・伏見工業高校から比べると最寄り駅から最も遠いが、京阪深草駅から徒歩15分以内であり、約1,700人の立命館中学・高校生が京都市内外から通学し、また最寄り駅からの距離が同程度あるいはこれ以上の距離がある市立高校もあることを踏まえれば、十分に通学可能と判断できる。

- ・本市の厳しい財政状況の下、「新しい工業高校」の整備に係る財政負担は可能な限り低くすることが望ましく、「まとめ」に示されている洛陽工業高等学校・伏見工業高等学校の敷地に新校舎を建築する案（72～96億円程度）と比較しても半額程度での整備が可能と見込まれる。

<参考 「新しい工業高校の整備候補地選定委員会」について>

1 「京都市立工業高校の再編に関する基本方針」で示されている検討の観点

- (1) 洛陽工業高校及び伏見工業高校の現敷地について、敷地面積の広狭、交通の利便性、埋蔵文化財の包蔵状況、所要経費等を比較・検討する。
- (2) 洛陽工業高校及び伏見工業高校の現敷地での整備については、大規模な工事に伴う長期にわたる教育活動への影響及び仮設校舎設置に伴うグラウンド利用制限等が見込まれるため本市が利活用に関する照会を受けている立命館中学・高校（京都市伏見区深草西出山町）について、地理的条件や施設状況、教育環境、工業高校として求められる実習室への改修の適否等を調査のうえ、候補地としての活用の可否を検討する。

2 構成メンバー（：座長，敬省略 五十音順に記載）

氏名	役職等
岡野 哲也	都市計画局公共建築部長
尾河 清二	洛陽京工会副会頭
信部 尚平	京都市立伏見工業高校同窓会会長
名高 新悟	京都機械金属中小企業青年連絡会元代表幹事
福本 早苗	武庫川女子大学生活環境学部建築学科教授
前野 芳子	前野公認会計士事務所所長 公認会計士・税理士
松重 和美	四国大学学長・京都大学名誉教授
村上 英明	京都市立高等学校長会会長
室 保次	京都市立中学校長会進路指導部会長

・上記以外に、洛陽・伏見工業高校の両校長もオブザーバーとして参加。

3 開催経過

	開催日	開催場所	内容
第1回	平成 25 年 5 月 24 日	伏見工業高校	・京都市立工業高校の再編に関する基本方針，整備候補地に係る施設状況等の説明
第2回 (視察)	平成 25 年 7 月 6 日	立命館中学・高校	・整備候補地の一つである立命館中学・高校の視察
第3回	平成 25 年 9 月 24 日	洛陽工業高校	・3候補地における諸条件等の比較検討
第4回	平成 25 年 11 月 6 日	伏見工業高校	・立命館中学・高校周辺の土地状況，同校の取得見込み額（非公開）の説明 ・3候補地における諸条件等の比較検討
第5回	平成 25 年 11 月 29 日	京都市総合教育センター	・「まとめ（案）」の策定
	平成 25 年 12 月 6 日	京都市役所	・「まとめ」の提出

開催経過の詳細については以下をご参照ください。

( <http://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/page/0000149788.html> )

<添付資料>

**参 考** 「新しい工業高校の整備候補地選定委員会」の「まとめ」について【概要版】

# 「新しい工業高校の整備候補地選定委員会」の「まとめ」について【概要版】

(平成25年12月)

## 1 はじめに

「新しい工業高校の整備候補地選定委員会（以下「本委員会」）」は、両校が築いてきた歴史と伝統をさらに充実・発展させる「教育の場」となるよう、本年4月に京都市教育委員会において策定された「京都市立工業高校の再編に関する基本方針」で示された以下の2点に基づき、洛陽工業高校（以下「洛陽工業」）・伏見工業高校（以下「伏見工業」）の統合・再編により創設する「新しい工業高校」の整備候補地の選定を進めた結果を本委員会としての「まとめ」として報告する。

- (1) 洛陽工業・伏見工業の現敷地について、敷地面積の広狭、交通の利便性、埋蔵文化財の包蔵状況、所要経費等を比較・検討。
- (2) 洛陽工業・伏見工業の現敷地での整備については、大規模工事に伴う長期にわたる教育活動への影響、仮設校舎設置に伴うグラウンド利用制限等が見込まれるため、本市が利活用に関する照会を受けている立命館中学・高校（以下「立命館中高」）についても、地理的条件や施設状況、教育環境、工業高校として求められる実習室への改修の適否等を調査のうえ、候補地としての活用の可否を検討。

## 2 洛陽工業・伏見工業及び立命館中高に関する諸条件の比較

本委員会では、整備候補地である洛陽工業（南区）、伏見工業（伏見区）、立命館中高（伏見区）の3校について、立命館中高の現地視察、本委員会事務局作成の整備比較資料などの資料に基づき、多角的な観点から比較・検討を重ねてきた。その結果は以下のとおりである。

### (1) 施設状況

#### 敷地面積・建物面積等

敷地面積は、洛陽工業が 32,736 m<sup>2</sup>、伏見工業が 42,728 m<sup>2</sup>、立命館中高が 67,573 m<sup>2</sup>（借地含む）であり、立命館中高が一番広く、現有建物面積は、洛陽工業が 22,676 m<sup>2</sup>、伏見工業が 20,795 m<sup>2</sup>、立命館中高が 21,710 m<sup>2</sup>であり、3校ともほぼ同程度である。

#### 立命館中高における工業高校としての転用の可否等

立命館中高は、普通科高校のため実習室等の面積の割合が低いが、普通教室を実習室等として再整備し、床下補強をするなどして、工作機械等を設置できる場所も確保できるため、新しい工業高校として整備が可能な状況。さらに屋内体育館2棟、800人規模の生徒を収容できる記念ホールや人工芝グラウンドなどを有し、公立高校には見られない充実した教育環境である。

#### 建物の耐震性等

洛陽工業・伏見工業は大半の既存校舎の耐用年数を考慮すると建替えが必要である。一方、立命館中高は新耐震基準以降の施設となっているが、建築後25年を経過しており、経年による劣化や地域の防災拠点としての機能を高めるといった観点から耐震性の強化に向け、詳細な調査に基づいて全面的なリニューアル工事や改修が望ましい。さらに敷地に高低差があるためバリアフリー化工事の検討も必要である。

また、立命館中高周辺において、国土地理院発行の「都市圏活断層図」で活断層の存在が推定されており、その安全性を懸念する意見もあったが、他の資料では、活断層の存在そのものが確認されていない。また、活断層直上では建物倒壊等の被害を免れることが困難であるという観点で厳しい規制を求めている徳島県の条例においても、規制範囲は活断層を基本として左右20mの幅とされているが、3校が活断層の直上にはないことが確認できた。

### (2) 利便性・立地

#### 利便性

洛陽工業は最寄りのJR西大路駅から徒歩5分程度、伏見工業は京阪伏見稻荷駅から徒歩7分程度と至近にあるが、立命館中高は京阪深草駅から徒歩15分程度。しかし、一般的に高校生の通学には支障はない範囲である他、洛陽と伏見工業高校の生徒数を合算しても、現在1,700人の中高生が通学している状況から約半数に減少することが見込まれるため、通学指導も可能と考えられる。

## 立地

洛陽工業・伏見工業は第1種住居地域，立命館中高については市街化調整区域，また洛陽工業では埋蔵文化財の本掘調査が必要である。立命館中高は第2種風致地区に指定されており，緑に囲まれた静謐な教育環境である。

立命館中高の劣化が指摘される擁壁については，同校が実施した変位測定調査や教育委員会と専門業者による現地調査の結果，ひび割れ等も経年劣化の範囲内であることなどから緊急性はないが，生徒の安心安全の面から必要な補修をするなどの対応は必要である。

### (3) 財政負担

洛陽工業・伏見工業の整備計画案について，それぞれ3案ずつ計6案を検討した。その整備費用は，72億円から96億円程度である。

一方，立命館中高は，床下補強，エレベータ設置などバリアフリー化工事や空調設備全面更新を含む全面リニューアル工事として23億円程度，同校の取得見込み額は不動産鑑定専門家から示された現段階での参考値であるが19～23億円程度と見込まれ，洛陽・伏見工業高校の整備計画に要する経費の半額程度での整備が可能となっている。

### (4) 工事に伴う生徒の教育活動への影響

洛陽工業・伏見工業での整備計画案では，工事着工から竣工までの工期は最短で2年半，最長で4年以上を要する。また，一時的に他方の工業高校に教育機能に移すことが施設的にも運営上も不可能であるとともに，整備期間中にグラウンド利用が制限されるが，近隣における代替グラウンドの確保は困難な状況にあり，とりわけ，体育の授業への支障が大きく，クラブ活動も制限される。加えて，生徒たちが在籍しながらの整備は，工事期間の振動・騒音対策や工事車両の安全対策が求められ，入学から卒業まで新校舎を利用できない生徒が生じる場合が想定される。

なお，立命館中高の整備計画案では，着工から1年以内の速やかな整備が可能となるため，両校の生徒への教育活動への影響を心配することはないと考えられる。

## 3 望ましい整備候補地

普通科高校だが工業高校として整備可能 財政上の負担が低い	公立では見られない充実した教育環境 生徒の教育活動への影響が生じない
---------------------------------	---------------------------------------

「新しい工業高校」づくりの期待や将来性も含め，以上の主な4つの観点から総合的に評価した結果，立命館中高を最有力候補地とすべきである。

しかし，同校は新耐震基準を満たしているが，建築後25年以上が経過している中，公共交通機関の利便性，擁壁の劣化や学校周辺に活断層が存在する可能性があるなどその安全性について強い懸念を表明する意見もあることから，施設設備の全面リニューアルの実施が望ましく，詳細な調査を実施のうえ，建物の耐震性の強化，擁壁の補修，バリアフリー化工事，通学路の安全確保の検討・実施など，生徒の安心安全の確保に万全を期すことが求められる。

## 4 結びに ～新しい工業高校に寄せる期待～

本委員会では，同窓会，学識者，産業界，建築の専門家，公認会計士，行政，教育関係者が幅広く参画し，候補地選定を進めてきたが，これは「新しい工業高校」づくりに向けた第一歩であり，今後重要なことは，科学・技術・工学・数学の一体的な「ものづくり」を目指すSTEM教育，京都ならではの教育力の積極的活用，人類の幸福に貢献する学び，京都や我が国，世界の文化や伝統，生活など社会の多様性を学ぶグローバルな取組を柱とする教育内容を具体化していくことである。

とりわけ，地域のまちづくりの中で，地域との連携，地域の活性化の核になるような存在を目指し，高校生はもとより，社会人，小・中学生も含めた「ものづくり拠点」となることを願っている。

今後，教育委員会におかれては，この「まとめ」を踏まえ，工業高校改革の「すべては生徒たちのために」という基本理念のもと，新しい時代に求められる我が国の「ものづくり」「まちづくり」を支える工業高校の整備を進めていただきたい。